

日14-134

「ふしぎな岬の物語」

◆◆◆

2014（平成26）年10月13日鑑賞

<梅田ブルク7>

監督：成島出

企画：吉永小百合、成島出

原作：森沢明夫『虹の岬の喫茶店』（幻冬舎文庫）

柏木悦子（喫茶店「岬カフェ」の店主）／吉永小百合

柏木浩司（“何でも屋”を営む悦子の甥）／阿部寛

竜崎みどり（徳三郎の娘）／竹内結子

タニさん（不動産屋、悦子と浩司を見守る「岬カフェ」の常連客）／笑福亭鶴瓶

竜崎徳三郎（漁師、「岬カフェ」の常連客）／笹野高史

柴本恵利（孝夫の妻）／小池栄子

柴本孝夫（花農家の1人息子）／春風亭昇太

大沢克彦（妻を病気で亡くした陶芸家）／井浦新

行吉先生（浩司やみどりが通っていた岬中学の教師）／吉幾三

ドロボー（元・包丁研ぎ屋）／片岡亀蔵

鳴海（牧師）／中原丈雄

雲海（僧侶）／石橋蓮司

富田（医師）／米倉斉加年

山本（岬村の警官）／近藤公園

中山健（浩司の弟分）／矢野聖人

三平（岬村の消防団員）／矢柴俊博

佐藤（孝夫の結婚式に参列した生花業者）／不破万作

消防団長／モロ師岡

高橋（孝夫の結婚式に参列した生花業者）／嶋田久作

ブラザーズ5（岬村青年団フォーク愛好会）／杉田二郎、堀内孝雄、ばんばひろふみ、高山巖、因幡晃

2014年・日本映画・117分

配給／東映

<本作の舞台は北海道！てっきりそう思ったが・・・>

吉永小百合118本目の出演作は、111本目の『北の零年』（05年）（『シネマルーム7』268頁参照）、117本目の『北のカナリアたち』（12年）

（『シネマルーム30』222頁参照）に続いて北海道が舞台！私は、てっきりそ

う思っていた。冒頭スクリーン上に映し出される木造平屋建ての小さな喫茶店はす

ぐ目の前が海だから、ホントに岬の先っぽに建てられている。こりゃ海の風が心地

よい時は良いものの、台風が来たら、雪が降ったら大変だろう。今年の夏の台風被

害の大きさを考えると、ついそう思ってしまう。また、屋根の上に備えられている

風見鶏を見ても、客席のど真ん中に据えられているストーブを見ても、「ここは襟

裳岬」とはいかなくても、北海道のどこかの岬に建つ喫茶店。

さらに、吉永小百合扮する岬カフェの店主・柏木悦子が「何でも屋」を営む甥の

浩司（阿部寛）と共に小舟に乗って小島に出かけ、湧き清水を汲み、また喫茶店を

飾る季節の野花を摘むシーンを見ても、ここは北海道。中盤に登場する農協連主催

の花嫁募集ツアーに参加した女性・恵利（小池栄子）と45歳にしてやっと結婚で

きるようになった花農家の1人息子・柴本孝夫（春風亭昇太）が挙げるお花畑での

結婚式を見ても、ここは絶対北海道。だって、このお花畑は私が2013年8月9

～12日の北海道・阿寒旅行で見た富良野のお花畑とそっくりだから。ところが、

本作後半に見る岬村伝統の鯨祭りのシーンを見ると、アレ・・・。どうも、ここ

は北海道ではなさそう。

しかして、パンフレットを読むと、岬カフェがある岬村は、何と千葉県にあるら

しい。モデルになったのは明鐘岬近くのトンネルを抜けると突如現れる喫茶店、

「音楽と珈琲の店」と銘打たれた岬カフェだ。その店に常連客として通っていた作

家・森沢明夫が書いたオムニバス形式でエピソードが連なる原作『虹の岬の喫茶

店』に惚れ込んだ成島出監督と吉永小百合の熱意によって、本作が誕生したわけ

だ。なるほど、なるほど。しかし、本作の舞台については、私と同じように錯覚、

誤解した観客はたくさんいるのでは？

<モントリオールでグランプリ！さて、本作の英語表記は？>

本作は、第38回モントリオール世界映画祭で、ワールドコンペティション部門

に出品され、2014年8月29日に上映。吉永小百合はフランス語で、阿部寛は

英語で、それぞれ舞台挨拶をしたそう。そして、現地時間9月1日夜、本作は審

査員特別賞グランプリとエキュメニカル審査員賞の二冠を見事に獲得した。

字幕をつけるのかどうかを含めて、外国の映画祭で邦画を上映する際の手法は知

らないが、10月15日付読売新聞「政（まつりごと）なび」は9月21日に結党

した維新の党の英語表記を論ずるについて、本作のタイトルを「まくら」として使

っている。そこには「モントリオール世界映画祭で審査員特別賞グランプリを受賞

した吉永小百合さん主演の「ふしぎな岬の物語」は、英語タイトルが「ケープ・ノ

スタルジア（望郷の岬）」なのだそう。『ノスタルジア』という言葉の響き

に、吉永さん演じる喫茶店主と店に集う人々の交流を描いた作品の温かな雰囲気

が感じられる。物語の内容をいかにうまく伝えるか。英語表記には工夫と苦心がに

じむ。」と書かれている。

村治佳織がギターで弾くメインテーマのタイトルも「望郷～ふしぎな岬の物語

～」だから、本作については確かに「望郷」がテーマになるのはまちがいない。し

かし、私には「望郷」という言葉にはうら悲しい響きが含まれていると思うため、

うら悲しさよりも明るさと希望が目立つ本作のタイトルにはあまりふさわしくない

のではないかと思っている。御年70歳直前にした吉永小百合演ずる柏木悦子が、

岬カフェに30年間毎日通っている不動産屋のタニさん（笑福亭鶴瓶）からも、甥

の柏木浩司（阿部寛）からも淡い恋心を抱かれているのは素晴らしいとしか言いよ

うがない。しかし、岬カフェが火事で燃える直前、悦子が浩司の前で、ひとり過去

の辛さをぶちまける姿は哀しみでいっぱい。一見とびきりの優等生にしか見えな

い吉永小百合演ずる悦子の心の中に、長年こんな苦勞を抱えていたことにビックリ

させられる、それが本作唯一のスリリングなシークエンスだが、本作の終わり方は

あくまでハッピーエンド。既に「事実婚」状態に入っているらしい浩司と竜崎みど

り（竹内結子）との間に子どもが生まれるとの報告は、ほんとに明るい話題。しか

し、「肩たたき」によって、大阪への転勤をやむなく受け入れたタニさんや、岬カ

フェの再建こそできたものの、常連さんが少なくなるばかりではなく、岬村自体が

「消滅自治体」になってしまう可能性が高い現実をみれば、ほんとに悦子がこれか

ら生きていくのは難しいのが現実だ。

杉田二郎、堀内孝雄、ばんばひろふみ、高山巖、因幡晃が演ずる、ブラザーズ5

（岬村青年団フォーク愛好会）も歌声こそしっかりしているが、既に70歳超のじ

いさんばかりだ。みどりの父親で、漁の後に岬カフェでコーヒーを飲むことを日課

にしている竜崎徳三郎（笹野高史）が癌で死亡したのも、寿命をまっとうしたの

だから悔いはないはずだが、とにかく本作の主要な登場人物はみんなじいさんばあ

さんばかりだ。現に徳三郎の健康をさかんに気遣っていた医師・富田役を演じた米倉

斉加年は本作公開直後に他界してしまっている。

そういうマイナス面をいっぱい表現すれば「望郷」というタイトルもフィットす

るかもしれないが、作り物の映画としては当然の、未来や希望を全面に押しだした

ハッピーエンドをみれば、もう少しピットリした英題が何かあったのではないら

うか？

<あくまで優等生的・吉永小百合でいいの？>

私は中学時代から大の吉永小百合ファン。いわゆるサクリストの典型だ。しか

し、2008年10月16日に「スカパー！」「e2 by スカパー！」の番組

『祭りTV！吉永小百合祭り』（放映期間10月31日～11月27日）にゲスト

出演し、吉永小百合像を語った私の目には、『動乱』（80年）、『天国の駅』

（84年）等の作品に見た吉永小百合は、女優として様々なチャレンジをし、輝い

ていたが、近時はあくまで優等生的・吉永小百合色が強くなりすぎている感が強

い。今の映画界で女優・吉永小百合を悪く言ったり、その主演作をけなしたりす

るのはタブー。どんな有名な映画評論家や映画監督でもそれはできないことになっ

ている。もともと、吉永小百合の女優としての演技力は大したものではなく、浜田光

夫との「ゴールデン・コンビ」時代でも、彼女より年下の和泉雅子の方が演技力は

断然上だった。しかし、女優をしながら早稲田大学に進み、ちょっと「左がかっ

た」活動をしながらも、「朝日新聞」のような批判をされず、日本映画界の中で吉

永小百合だけは誰も悪く言ってはならない存在という「不文律」を確立してきたの

はずだ。あえて言えば、吉永小百合の出世作となった浦山桐郎監督の『キューボ

ラのある街』（62年）にしても、北朝鮮への帰国事業を賛美していたシーンは大

問題だし（『シネマルーム21』81頁参照）、山本薩夫監督の『戦争と人間』3

部作（70、71、73年）でも、吉永小百合は財閥の娘ながら、山本主演する

「アカの青年」と恋仲になり、家を勤当された立場だから、そういう目で見れば

いろいろな批判ができる（『シネマルーム2』14頁、『シネマルーム5』173頁

参照）。しかし、「そういう批判は一切しない」というのが日本映画界では暗黙の

了解となっているようだ。

それを意識してか、吉永小百合の初プロデュース作となる本作で、彼女はそんな

自分の立場を徹底的に強調している。パンフレットにあるインタビューで彼女は

「みなさんの心の中にじんわりと静かに残る作品こそ、いま私がいちばん望む映画

です。」と語っているが、まさに本作は全編通じて、そういう「作り」になってい

る。前半に挿入される「ドロボーさん」（片岡亀蔵）とのエピソードはその典型

で、これなどタニさんを演じた鶴瓶師匠が本業の落語ネタで使えば、結構面白い人

情話になるはずだ。岬カフェの店主としての悦子はあくまで「待ちの姿勢」、「受

け身の姿勢」だが、ホントに観音サマのようにすべての人を受け入れ、その悩みを

共有しているわけだ。したがって、その当初の意図どおりに、本作が「必ずどこ

かに、自分を思ってくれている人がいる。ひとりじゃないんだ」と語りかけるよう

な作品になったことはまちがいない。また、そんな本作の良さがカナダのモントリオ

ールでも受け入れられたからこそ、審査員特別賞グランプリとエキュメニカル審査

員賞を受賞できたわけだが、70歳直前にしてもなお、あくまで優等生的・吉永小

百合でいいの？

<世代交代は？事業承継は？>

今や日本国最大の問題点は、少子高齢化とその行き着く先としての「地方消滅」

=「消滅自治体」になっている。弁護士として丸40年を迎えた私は、日々の事件

処理と映画評論活動を通じてそれを実感している。そんな日本国最大の問題点が象

徴的に表れているのが、悦子の住む岬村であり、岬の先に1軒だけ建っている岬カ

フェだ。常連客がいるのはいいが、それは別の言い方をすれば、その常連客がい

なくなれば次の客はいないということ。つまり、常に新陳代謝を繰り返す、次の顧客

を開拓していなければ、いずれ岬カフェは潰れてしまうということだ。本作にみる

常連客だけで岬カフェの経営が成り立つはずがないはずは、誰にでもすぐにわか

る。それは映画は作り物として許すとしても、そもそも岬カフェのビジネスモデル

はたまた本作では成り立つとしても、今後はムリということだ。

そんな目で本作を見ると、まず疑問なのは、火事で焼けた岬カフェがなぜ再建で

きたかということ。火災保険に入っていたことが前提だとしても、本作にみる火事

のシーンは弁護士の目からみるとかなり「問題あり」だから、さて、保険金は出る

の？出ないの？さらに、タニさんが大阪に行ってしまう、竜崎徳三郎が死んでしま

う等、常連客がどんどん少なくなっていることは明らかだ。そんな中、唯一の希望

は徳三郎の娘・竜崎みどり（竹内結子）が東京での結婚生活の破綻という不幸な出

来事のおかげで、故郷に戻り、そこで生きていく決心をしたこと。とはいっても、

岬村のような田舎にみどりがしっかり稼げる仕事があるとは思えないから、ポチ

ポチ引退を考えている（？）悦子と、おいしいコーヒーを入れたいと真剣に考え始め

たみどりのニーズがうまく合致すれば、そりゃベスト。その結果、本作の美しいラ

ストシーンとなり、一見、世代交代と事業承継がうまくいくようなイメージのハッ

ピーエンドになるのだが、現実はずて・・・？

映画はエンタメ！そう割り切れば、このラストの美しさを味わいながら、岬カ

フェで生きていく決意を固めた柏木浩司とみどりの若い2人の未来に拍手を送ればい

いのだが、弁護士の目で見ると、さて現実はずて・・・？